

大学と遠隔地との地域連携教育の実践（1）

—文化学園大学「飯山地域連携プロジェクト」の展開と可能性—

Educational Practice of Community Education Programs at Universities and Remote Locations (1)

—Development and feasibility of the "Iiyama Education Program Project" at Bunka Gakuen University—

栗山 丈弘¹⁾、田中 直人²⁾、山崎 裕子³⁾、森谷 直樹⁴⁾

Takehiro Kuriyama, Naoto Tanaka, Yuko Yamazaki, Naoki Moriya

要旨

文化学園大学では、2010年度からUSR（University Social Responsibility）活動の一環として、長野県飯山市との地域連携による教育活動を実践している。本研究の目的は、大学と遠隔地における本連携プロジェクトの3カ年の取組みを整理することを通じて、時間的、物理的、制度的な制約条件がある中で連携活動を推進していく上での意義を考察することである。その結果として、第一に、都市にはない自然的、文化的環境を学習理論の1つである正統的周辺参加論（Legitimate Peripheral Participation）における実践共同体と解釈することにより、参加学生と地域の双方に連携の意義を見出せること。第二に、学部、学科を超えた横断的に学生が参加できる枠組みを構築することで、地域に提案するアイデアに多様性がもたらされ、ひいては、地域在住の人々では気づかない新たな価値の発見につながる。第三に、持続可能な地域連携活動を展開するためには、飯山市の地域資源を教育資源として整理するための構想カリキュラムを設定することが有効であることを示した。

●キーワード：地域連携教育（Community Education Programs）／遠隔地（Remote Locations）／
正統的周辺参加（Legitimate Peripheral Participation）

はじめに

2005年1月の文部科学省中央教育審議会の答申「我が国の高等教育の将来像」において、大学の機能分化のひとつとして社会貢献機能（地域貢献、産学官連携、国際交流等）が明示され、大学には研究、教育と並ぶ第3の使命として「社会貢献」が求められるようになった。これを背景に各大学では、自らの教育理念に即した独自の社会貢献活動が展開され、それらの研究成果も蓄積されつつある。

例えば、基礎的な研究としては、松村邦彦（2009：39）の大学の地域貢献の今日的意義を社会動向の観点から論じたものや、羅明振ら（2012：7）による大学が社会貢献・地域連携をする際の大学生の意識についての調査などがある。一方、実践にもとづく研究では、長谷川誠（2010：211）は3つの大学の取組み事例からスポーツによる地域連携活動が地域社会における市民の健康・福祉に寄与することを明らかにした。また、加藤修ら（2012：447）は、アートプロジェクトによる千葉大学と柏市との地域連携活動をESD（持続発展教育）の視点から考察し、学生への教育的意義を論じた。宮下智裕

（2008：119）は、建築資産の再活計画を地域住民と学生とで作成した金沢大学と野々市市との事例を報告している。これら実践研究は、大学キャンパスが所在する地元地域（所在自治体や所在地に近接する自治体）を対象とした事例がほとんどである。

もっとも大学が地域連携を展開する場合、貢献そのものの意義やその活動の展開のしやすさからいえば、地元地域をその対象とすることは当然のことといえる。しかしながら、我が国の大学の所在地は都市部に集中しており、少子化や過疎化が著しく進行する地方では、大学そのものが撤退する事例も出てきている。仮に大学の地域連携の取組みが、大学所在地に限定されるならば、その恩恵を受けられる地域とそうでない地域に格差をもたらすことになる。したがって、大学の知的資源は、むしろ大学がなく、少子高齢化や過疎化といった諸課題抱える地域の活性化等により向けられるべきといえよう。翻って、地元地域を離れて地域連携活動に携わる学生に対しては、日常では経験できない様々な刺激を与え、新たな視野を獲得させるといった教育効果も期待できる。とはいえ、物理的な距離の大きさは、時間的、経済的、心理

的な負担を生むが故に連携事例は少なく、その研究成果も蓄積されているとはいえない。

本研究では、東京都渋谷区に本部を置く文化学園大学と長野県北部に位置する飯山市との地域連携による教育実践を取り上げる。研究目的は、2010年にスタートした大学と遠隔地における本連携プロジェクトの3カ年の取組みを整理することを通じて、時間的、物理的、制度的な制約条件がある中で連携活動を推進していく上での意義を考察することである。

なお、本連携プロジェクトの学生への教育効果については、本稿(2)〔「大学と遠隔地との地域連携教育の実践(2)―文化学園大学「飯山地域連携プロジェクト」の教授学習課程とその検証―〕にて詳細を述べている。併せて参照されたい。

1. 飯山地域連携プロジェクトに至る背景

1.1. 服装学部USR推進室の設立とGP「ファッション循環型社会対応教育の新展開」について

文化学園大学(以下、本学)では、2009年度に服装学部USR推進室を設立し一層の社会貢献活動に取り組むことを目指した。USRとは、University Social Responsibilityの略であり、同推進室の使命は、すなわち「大学の社会的責任」を積極的に果たしていくことである。その主な取組みは、企業、卒業生、社会環境、地域社会を対象とする4つの連携活動である。

このうち、社会環境と地域社会連携を対象とした取組みが、2010年度の文部科学省の大学教育・学生支援推進事業「大学教育推進プログラム「ファッション循環型社会対応教育の新展開」として採択された。このプログラムでは、持続可能な社会の構築と地域社会の再生という課題に応えるために次の3点を基本方針としている。

- ①従来のカリキュラムと平行し、環境に配慮するビジネスモデルを構築できる人材育成のための「ファッションエコモデルプロジェクト」を実施し、同時に、学内の繊維ゴミの回収とリサイクルを通じて、大学が可能なリサイクルモデルを築く。
- ②それらの教育成果と連動して、地域社会を再構築し、活性化することのできる人材育成のための「地域・社会連携プロジェクト」を行い、大学の社会的責任を射程に入れた新しい教育を実現する。
- ③中国など今後ファッションのリサイクルが必要になる地域と共同して、ファッションリサイクル関連カ

リキュラムの国際的開発を進めて、ファッション環境教育の先駆的役割を果たす。

(「ファッション循環型対応教育の新展開」ウェブサイトより摘記)

長野県飯山市との地域連携プロジェクトは、上記の②に該当し、本学新都心キャンパスの所在する渋谷区との連携プロジェクト¹⁾と並び取組まれるものである。

とりわけ本連携プロジェクト飯山地域連携活動の性質に合わせ、独自の目標として以下の2点を設定している。

〈地域への貢献〉

本学の専門性や学生のアイデアを活かして「地域の持続性(自然と文化を守り育む住民が存在し続けること)」の確保に貢献すること。

〈学生への教育〉

地域社会の抱える問題を理解し、対応策としてなされる活動を経験することで、参加学生の中に地域社会に対する問題意識と、主体的、積極的に行動できる公共心が涵養されること。

1.2. 文化学園と長野県飯山市との関わりについて

長野県飯山市を連携先とした理由は、本学がセミナーハウスである「文化北竜館」を有しているからである。本施設は1962年に飯山市の瑞穂地区に附属する北竜湖スキー場とともに文化北竜湖山荘として開設されたものである。以来、本学のスキー実習や、新入生の入学時の研修先として活用されてきた。地域に対しては、スキー場の開放や納涼花火大会²⁾を開催してきたほか、2005年には、山荘を温泉宿泊施設としてリニューアルし、市民や旅行者にも親しまれる施設になっている。このように、学園の施設を有し所縁がある飯山市を、第二の地元地域として捉え連携先とした。

2. 飯山の地勢・産業

ここでは、本連携プロジェクトがフィールドとしている長野県飯山市の地勢と産業についてその概略をまとめる。

2.1. 地勢

飯山は長野市の北30キロ、県最北の地にあり、新潟県との境に位置する。長野市からはJR飯山線を使って

45分、高速道路ではその半分程の時間で行くことができる。水内、高井、更科、埴科の四郡で構成される北信地方には、2012年現在で15の自治体があり、さらにこれは長野市を中心とした「長野地域」と飯山市を中心とした「北信地域」に分けられる。

海拔は315mで、県内では最も低地にある市のひとつである。東に三国山脈、西に関田山脈がひかえることで、市街域は南北に細長く広がることとなり、これは市の東端を流れる日本最長の川、千曲川（長野県内における信濃川の別名）の流れにおよそ沿う形となる。また飯山は、長野県内の多くの市がそうであるように盆地に開けた町であり、市域の殆どが含まれる飯山盆地はこの千曲川の沖積地に広がっている。

気候は内陸部にあるため、気温の日較差、年較差が大きいとされる。冬期は日本海から吹き付ける水分を大量に含んだ寒風が関田山脈にぶつかることで大量の積雪をもたらすため、12月下旬から4月上旬までは野山も里も雪に埋もれることとなる。積雪量は平年で2、3m、山間部では5mをゆうに超え、日本有数の豪雪地帯として知られる。

平成22年の国勢調査では飯山市の総人口は23545人である。過去の記録を繰ると、昭和60年で既に30000人を割り込んでおり（29034人）、以降減少し続けていることが知られる。この人口の内訳を丁寧に見てみると、その高齢化率の高さが分かる。昭和60年時点で、年少人口（0～14歳）5796人（構成比20.0%）に対し、老年人口（65歳～）4700人（16.2）であったものが、平成22年では年少2934人（12.5）、老年7282人（30.9）となっている。当然ながら生産年齢人口（15～64）も緩やかに減少しており、国政のレベルで大きな問題とされる少子高齢化が、地方の中小市域ではより先鋭化した形で進んでいる実態が看取される。

2.2. 産業

商業：まず挙げねばならないのは商業地発展の不均衡である。市域内の商店街としては、JR飯山駅前から始まる上町、本町、仲町通りや、JR戸狩野沢温泉駅前周辺などが挙げられるが、いずれにおいても空き店舗数の増加が顕著であり、かつての賑わいが失われつつある³⁾。

一方で大型小売店舗数は年々増加しており、一般小売店及び中小スーパーから大型店舗へと人の流れが移っていることが確認される。大型店が相次ぎ出店した静間バ

イパスの沿道では、県北部を南北に貫く国道（18、117、292号線）と接続する利便性が活かされ、周辺市域までも商圈とした新たな商業集積地が形成されつつある。

かつて郊外であった土地に新たな商業地が展開し、近世飯山藩の城下町に端を発する町中心部が空洞化、郊外化していることは、飯山の目抜き通りである本町の店舗構え数と出店数の減少が目に見える形で示している。平成26年春の北陸新幹線飯山駅の開業をひかえ、こうした市域内部における発展の不均衡をどう調整してゆくか、伝統的な城下町にどう価値付けをし⁴⁾、活気を取り戻してゆくかが、今後の市政の大きな課題となっている。

工業：現況を概観するものとして、工業団地企業が下支えする現状を挙げたい。市内の工業における事業所数と従業員数は、平成2年をピークに減少が続いている⁵⁾。ただ、平成18年になると、事業所こそ29と減少傾向が続くが、雇用の人数は1606人となり、若干の回復をみせている。

これら市内工業を主に支えているのは、昭和40年代より市が積極的な誘致をおこなってきた工業団地内の企業であり、これら製造業の平成18年時点での製造品出荷額344億円は市全体の出荷額の実に96.1%を占め、雇用従業員数973人は同じく60.6%を占めている。長引く不況の影響もあり、安定的な求人確保が困難となるなか、若年層の働き口の確保のため、市では企業誘致をさらに積極的に進めている。

また、近世以来の伝統工芸である飯山仏壇、および内山紙は、生産量、出荷額はともに最盛期に比べて減少している。しかし両産業については、製作技法の中に豪雪地飯山の気候風土を反映した、文化的に大きな価値を有するものであることから、市民の中にこれを見直す動きが広がっている。伝統工芸職人の中にもその技法を守りながら新たな用途を模索する活動が始まっており、市民や観光客に向けた体験工房も賑わいを見せている。

観光業：飯山の産業にあって、今も昔も支柱となるのは観光業である。特徴を端的に示すならば、自然資源を核とした首都圏誘客を見込んだ観光、ということになる。市域内には豊かな自然の残る森林、丘陵、高原や、湯量豊富な温泉場があり、これらを活かしたレジャー施設の存在は、地域経済にとって長らく大きな意味を持ってきた。とりわけ昭和30年頃から冬場の農家の副業として始まったスキー民宿の経営は、折からのレジャーブームにも乗って盛況となり、行政や企業による大規模スキー場開発へと繋がった。スキーリゾートの開発は冬

場の収入減や出稼ぎ労働の労苦を遠ざけると同時に、首都圏から多くの人を呼び込み、市に多大な収入をもたらすこととなった。

近年、スキー場を核としたレジャー産業は全国的に集客に苦しんでおり⁶⁾、新たな局面を迎えているといえる。そうした産業形態の一大転換を迫られる中、かつてのスキー民宿は冬場のみならず夏場も営業し、所謂農家民宿として合宿の受け入れを行っている。これには地方での自然体験を求める都市部の小中学校から多くの申し込みがあるという。

また、山や森における自然浴、森林セラピーは、一過性のブームに留まることなく安定的な集客をもたらしており、その振興は市の観光戦略の重点施策として位置づけられている⁷⁾。森林セラピーにおいては、日本有数の活動拠点として、斑尾、鍋倉、戸狩、北竜湖の名はよく知られるところであり、愛好家から注目される地域となっている。

こうした豊かな自然を核としたツーリズム事業は、信州いいやま観光局を中心に進められる「日本のふるさと」をキーワードとした観光誘客と親和性が高い。観光局ではふるさとの原風景を楽しむプランを積極的に提案し、着地型観光のモデルケースとしても注目されるようになってきている⁸⁾。今後は新幹線駅開業を睨んで、周辺の野沢温泉村、木島平村、栄村、中野市などと結びつけた広域観光の枠組み作りが求められている。

農業：農業では付加価値を持った作物の開発、生産が進められている。米生産への依存度は年々低下しており、代わって花や野菜の畑作が増え、生産額も米に並ぶほどとなっている。とりわけグリーンアスパラは生産量が日本一となるまでに産地化が進められ、市内の農業利用土地の23% (517433アール) がアスパラ生産に充てられた。また依存度自体は低下している米も、近年、品評会にて高い評価を受ける商品が生まれてきており、中にはブランド米となって付加価値を持って取り引きされるもの⁹⁾もある。

農産物の輸入自由化や、農業就労人口の減少など、農業を取り巻く現状は決して楽観できるものではないが、担い手の確保を目指して農業所得向上にむけた様々な努力が進められている。長峰丘陵や市北部地域においては会社化された農業団体が様々な農産品作りに取り組んでおり、ここには少なくない若者が就労している。飯山特有の寒暖差の激しさは、作物によってはその糖度を増しうまみを増幅する効果があるといわれており、気候に

合った商品作物の生産を意識した積極的な農業が展開されている。

また昔ながらの家族経営においても、新たな農法の導入により品質を高め、首都圏の小売店と独自の販路を築く農家もある。また農業分野にもITが普及したことにより、生産者自身が様々な情報を発信できるようになると同時に、その製品に対する評価が目に見える形で返ってくるようになった。このことは、飯山の農業にも確実に変化をもたらしており、若手農家が新しい農業を構想し挑戦してゆく上での助けにもなっている。

3. 2010年度一飯山地域連携プロジェクトの準備期

3.1. プロジェクトの端緒

飯山市と本学とが連携し、具体的にどのような活動を展開すべきか。その方向性を定めることが最初の課題であった。2010年4月から活動をスタートするために、この年の2月頃から関係各所にヒアリングを実施した。対象は飯山市経済部や信州いいやま観光局、地元商店組合である本町商店街協同組合などであった。また、このヒアリング調査の中から、法政大学人間環境学部の小島聡教授が、「持続可能な地域社会と公共政策」をテーマとして飯山市をゼミ活動のフィールドとしていること¹⁰⁾が明らかになり、後日、小島教授と面会し本学の活動への助言を受けた。この出会いは、詳細は後述するが、本学と法政大学との大学間交流へと発展している。

プロジェクトの方向性を決定づける発端となったのは、本町商店街協同組合との話合いであった。同組合理事長の滝澤博信氏(洋品店経営)から「飯山には2015年の春に、北陸新幹線が開通する。若い人たちのアイデアで飯山らしいお土産つくったらどうか。きっと地元の我々が気づかない面白いものが出てくるのではないか」という提案を受けた。この提案は、ファッションや造形といったクリエイティブな領域を学ぶ学生の専門性に近いこと、企画にあたっては、飯山らしさ、すなわち飯山のもつ価値を理解し、それをお土産商品という、あらたな視点で再構成することが求められることなどから、地域・社会連携プロジェクトが目指す「地域社会を再構築し、活性化することのできる人材育成」というねらいに即した活動が期待された。

3.2. 活動の枠組み

滝澤氏からの提案を受けて、学内で活動の具体的な枠組みが協議された。その中では単に、企画提案に終わる

のではなく、審査までを含むコンテスト形式にすることで、学生のモチベーションを高めることを企図した。そして、信州いいやま観光局と本町商店街協同組合の協力を得て、「いいやまいいみやげプロジェクト」としての枠組みを整えた（図1）。

3.3. 活動の展開

USR推進室の活動は、研究室のゼミ活動とは異なり特定の学生を抱えているわけではない。そのため、活動の推進にあたっては参加学生をその度に募らねばならない。活動の枠組みが固まった4月から、担当教員が授業などを通じて飯山地域連携プロジェクトの概要を周知し参加学生を募った。また、新入生を対象に毎年5月に文化北竜館で開催されるフレッシュマンキャンプ¹¹⁾でも、一部学生に、飯山市街地の現地視察を実施¹²⁾し、プロジェクトへの参加を呼びかけた。

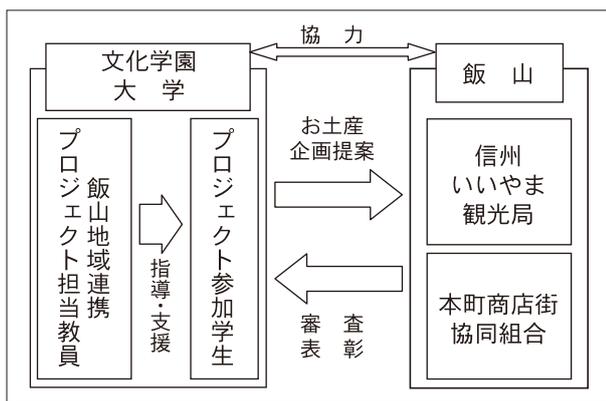


図1. いいやまいいみやげプロジェクト（2010）の枠組み

表1. いいやまいいみやげプロジェクトの展開

2月	飯山での活動体制の構築
4月	参加学生の募集開始
5月中旬	フレッシュマンキャンプでの現地視察
5月25日	第1回：説明会 活動開始
6月9日	第2回：商品企画会議
6月22日	第3回：ラフ(暫定)企画提出
6月下旬～7月上旬	暫定企画書を観光局・商店街組合に送付 アドバイスを頂く
7月20日	第4回：ラフ(暫定)企画とアドバイスを学生 に返却
9月21日	第5回：最終企画書提出・プレゼンテーション
9月下旬から 10月中旬	企画書、プレゼンVTRを観光局・商店街組合 に送付・審査
11月2日～5日	文化祭にて、表彰式および企画書展示

このような呼びかけに応じ30名（服装学部1年生 服装学部・造形学部3年生）の学生がプロジェクトに参加することとなった。5月に第1回の説明会を開催した後、概ね月に一度、授業の空き時間に集め、企画づくりのための情報提供や指導を行なった。企画の途中で、信州いいやま観光局や本町商店街協同組合に素案を送付することで助言を受け、アイデアを具体的な企画として煮詰めていった。9月には、プレゼンテーションを開催し、その様子をVTRに収め企画書とともに送付し、審査材料に供した。この年は、最終的には、10点の企画書が提出された（表2）。

表2. 提出された企画（2010）

企画名・テーマ	種別
アスパラand菜の花クッキー	お菓子
和紙でできている菜の花ヘアゴム、ブローチ	アクセサリ
いいやま菜の花帽子クリップ	アクセサリ
菜の花マニキュア	コスメ
菜の花が春をつける恋の香り紙石鹸	石鹸
アスパラふせん	文具
みんなのクリアファイル	文具
あすばりリコーダー	楽器
いいやまモチーフパターン	パターンデザイン
菜の花と刺繍のバック・ポーチ	刺繍デザイン

審査の結果、「いいやまモチーフパターン」（図2）が最優秀賞に選ばれたほか、優秀賞2点、特別賞、奨励賞各1点が選出された。表彰式および作品展示を本学学園祭である文化祭にて実施し、初年度の活動を終了した。

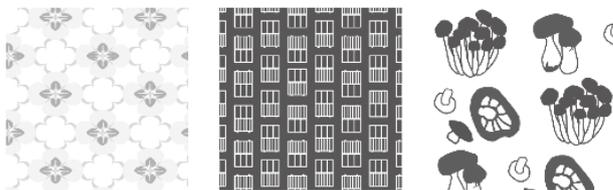


図2. 最優秀賞「いいやまモチーフパターン」(部分)

3.4. 飯山地域連携プロジェクト2010の成果

3.4.1. 地域貢献の成果

最優秀賞を受賞した「いいやまモチーフパターン」はデザインとしての完成度が高いことや、パターンを使用した商品への応用性が高いことから、商品化への道筋が模索された。学生、大学、信州いいやま観光局の三者で

検討した結果、葉の花の模様を使用したお土産品の紙袋が制作された。この紙袋に飯山の特産品である生そばやりんごジュースを詰め合わせにしたセットの販売会が、飯山市の道の駅「花の駅千曲川」で行なわれた。提案のみならず、企画の具現化、社会への発信という成果が得られ、地域貢献のきっかけをつくることができたと考えている。

本学と信州いいやま観光局とのコラボレーションによる道の駅での特産品販売会の様子は、地元の新報でも大きく紹介され¹³⁾、話題となった。



写真1. モチーフパターンを使用したお土産用紙袋

3.4.2. 学生教育の成果

このプロジェクトは、参加学生が1年生と3年生から構成された学年を超えた学びの場であった。また、服装、造形両学部からの学生が参加した学部を超えた学びの場でもあった。さらに、任意参加の活動として、授業ではないオルタナティブな学びの場であった。また、自らの企画は教員ではなく、飯山の地域振興に携わる方から評価されるという、借り物でない学びの場でもあった。このような学びの環境は、参加学生に多様な刺激をもたらしたといえよう。

3.5. 飯山地域連携プロジェクト2010の課題とその対応

3.5.1. 課題

一定の成果があった一方、活動を継続していく上で検討すべき課題として以下の3点があげられた。

1つは、学生の地域理解の不足である。参加した全員が現地を訪れているわけでないため「飯山らしさ」を十分に理解し、お土産企画に反映させることが困難であった。現地視察をした学生であっても、春の葉の花、アスパラという視覚的に印象に残ったものを活用した企画が大半であり、表面的な理解に留まってしまった。飯山らしさを理解するために現地学習を行なうなどインプットの活動を充実させることが課題となった。ここに「飯山

らしさ」を理解するには何を、どのように提示すべきかを精査する必要性が顕在化した。

2つには、成果物（アウトプット）の形である。お土産は確かに、地域固有の価値を内包したメディアとして企画するにふさわしいものである。しかし、これを継続的に行なうことは、たとえ上記のインプット（地域理解）を工夫したとしてもいずれ限界が来ることが予見された。どのようなものを提案していくかについても検討することが必要であった。

3つには、プロジェクトへの参加呼びかけの方法である。初年度は、担当教員の呼びかけに賛同した学生の任意参加であったが、教員が周知できる範囲は限定的であり、より多くの学生に周知し、参加機会を提供することが求められた。また、任意参加の場合学生を指導する時間的な制約も大きく見直しが必要であった。

3.5.2. 次年度の取組みにむけた対応策

上記の課題を改善し、連携活動をより機能的なものにするため、①単位化と②構想カリキュラム開発という2つを2011年度の課題として取り組んだ。

①単位化—「循環社会演習A」の開講

より多くの学生に参加の機会を提供し、また、十分な現地学習の期間を盛り込むためには、課外活動ではなく、授業の一環として行ない単位化を図ることが望ましいと考えた。そこで本学独自の教育課程の1つであるコラボレーション科目として「循環社会演習A」を開講することとした。コラボレーション科目とは、概ね9月と2月に3日～5日間程度の集中授業形式で開講される科目群であり、学外での研修なども可能である。学部学科に捉われず履修可能であり、多様な学生の参加を可能とするものである¹⁴⁾。

②構想カリキュラムの開発

構想カリキュラムとは、授業を計画する段階で、教師が頭に描く見取り図である。構想カリキュラムという概念は、十分に市民権を得た概念ではないが、例えば、国際理解教育においては、その学習領域や学習内容を明確化したカリキュラム開発の基本的枠組みを提示し、これを構想カリキュラムとしている。（多田孝志、2006：18）構想カリキュラムにより、学習内容として取り上げる主題が、どの学習領域に位置づき、他の主題とどのように関連するのかを、教師が把握することが可能となる。

この考え方を、本活動に援用し、飯山地域連携活動のための構想カリキュラムの開発を試みた。これにより、学生に触れさせようとする個々の地域資源が、飯山市全体の地域資源の中で、相対的にどのような位置にあるのか、他の地域資源とどのように関連するのかを教師自身が認識し、教育的な意義付けを行うこと、すなわち地域資源の教育資源化を図ることが可能となる。こうした認識がないかぎり、合目的な実践的カリキュラムを生成することは困難である。

さらに、遠隔地における本連携プロジェクトは、現地学習を展開する時間的な制約も大きいことから、より効率的に授業運営を行うための学習モデルを明らかにすることが重要である。そこで、コラボレーション科目による3泊4日の現地学習を組み込んだ学習モデルを設定し、そのモデルを実践レベルで展開する際に活用可能な教育資源をリスト化した。これにより教育資源リストから何を選択し、学習モデルのどこに組み込むかによって、複数の実践カリキュラム（授業計画）を生成することが可能となる。つまり、学習モデルと教育資源リストからなる構想カリキュラムは、毎年の実践的なカリキュラム（授業計画）の源となる基本的枠組みであるといえる。その選択項目によってカリキュラムにテーマ性やバリエーションがもたらされるため、単年度の授業計画だけでなく、複数年にわたるカリキュラムを構想可能なものにするのである。

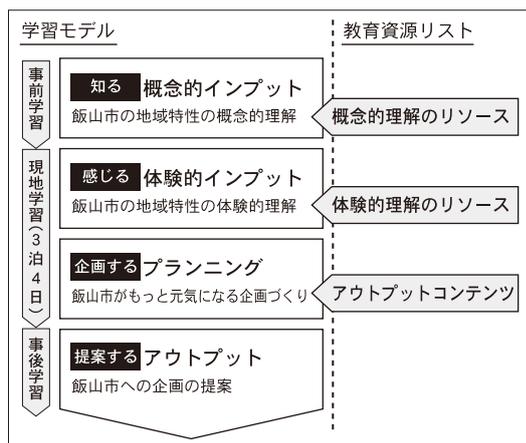


図3. 本連携プロジェクトの構想カリキュラムの構成

学習モデル

「循環社会演習A」の授業計画にあたり、事前学習および3泊4日の現地研修、飯山への企画提案を盛り込んだ学習モデルを設定した（図3）。

まず、事前学習において飯山とはどのような地域であ

るのか、その地域的特性を「概念的」に理解する。その主たるリソースは、ガイドブックやウェブサイト、飯山を舞台とした映画「阿弥陀堂だより」などのメディアである。これらのメディアの情報を受動的にうけとめるのではなく、ダニエルJ. プーアスティン（1964：127）が「われわれは現実によってイメージを確かめるのではなく、イメージによって現実を確かめるために旅行する」と述べているように、地域イメージはメディアによってつくられる側面を持つため、それらを分析的に捉えるよう配慮する。現地学習では、視察や調査よりもむしろ体験学習を組み込み、飯山を「感じる」という体験的理解を促す。事前学習での概念的的理解と現地での体験的理解が相互補完的に作用し、「飯山らしさ」つまり、地域の価値を立体的に捉えられるように配慮する。「飯山らしさ」の理解の上にならば、これをPRする企画を考え、持ち帰って精査し、最終的な企画として提出する。

教育資源リスト

学習モデルでは、事前学習段階での概念的的理解、現地学習段階での体験的理解を土台として、企画をプランニングし、それを提案（アウトプット）するという構造となっている。それぞれの段階で、教育資源として活用可能なリソースやコンテンツをリスト化したものが表3～5である。

概念的的理解のリソース

概念的的理解のためのリソースは、映画やウェブサイト、パンフレットといったメディアからなる。事前学習の段階では、自習にたよる割合が高いため、学生が自らアクセスしやすいものを精選した。

ウェブサイトやパンフレットは、飯山から発信された内から外への情報である。ここでは飯山の人々が、どの

表3. 「概念的的理解」のためのリソース

【映画】 『阿弥陀堂だより』	(2002年公開 小泉堯史監督作品) 東京の暮らしに疲れ果てた一組の夫婦が、大自然(ロケ地 飯山市)の暮らしの中で再生していく姿を描いたヒューマン・ドラマ。
【ウェブサイト】 飯山市役所	http://www.city.iiyama.nagano.jp/
信州いいやま観光局	http://www.iiyama-ouendan.net/
いいやま旅々	http://www.tabi-tabi.com/
歩こさ飯山	http://www.iiyama-ouendan.net/arukosa-iiyama/top.php
高橋まゆみ人形館	http://www.iiyama-ouendan.net/ningyo/
【パンフレット】 飯山市公式観光ガイドブック	信州いいやま観光局 2011年発行

ように自己理解し、他者に対してどのように理解してほしいのかを捉える手がかりとなる。一方、映画『阿弥陀堂だより』の場合、映画製作者が、飯山をロケ地として選定しその風景を作品に取り入れている。つまり、外から内に対するまなざしが作用している。内から外、外から内という視点は相互補完的であり、両者に触れることによってより理解が深まるものと考えている。

体験的理解のリソース

体験的理解のためのリソースは、地域資源のうち我々が行なおうとする教育活動に利用可能なものを抽出した。すなわち、「地域の教育資源」と呼ぶべきものである。抽出のための条件としては以下を設定した。

- ①地域固有の資源であり、かつ、都市部（東京）で生活する学生の日常には見られないもの。
- ②短期間の現地学習において、学生の既有知識・経験と照らし合わせ、その価値を認識し、理解できるもの。

これらを山川、植生、景観などに代表される「自然資源」と、歴史、習俗、生活様式などに代表される「文化資源」、またこれらを複合的に持つ「複合資源」の三種に分類し、さらに、具体的な形を結ぶ「有形資源」、形を持たない「無形資源」、複数の資源が含まれる「総合資源」に三分し整理したもの¹⁵⁾が表4である。

自然資源：千曲川（信濃川）と関田山脈に育まれた動植物がその中心となろう。黒岩山は天然記念物に指定されるギフチョウ、ヒメギフチョウの群生地として知られ、鍋倉高原のブナ林は日本有数の規模を誇る。これら山林資源には、関田山脈では信越トレイルが整備され、鍋倉高原では信州いいやま観光局によりなべくら高原森の家が運営されている。いずれも飯山の豊かな自然を活かした教育、観光施設として多くの利用者がある。

菜の花の丘公園は毎年ゴールデンウィークに行われる菜の花まつりで賑わう。唱歌『ふるさと』『朧月夜』で知られる高野辰之が飯山市で青年時代を過ごしたことから、高野の見た、入り日薄れる朧月夜の風景を市内に再現する意味を込めて整備が進められた。植えられる菜の花は野沢温泉村の名産である野沢菜の花である。

文化資源：仏教信仰に関わる近世以降の資源が核をなしている。飯山城西方の山際に二十数カ寺が立ち並ぶ寺町（現愛宕町）は江戸初期の史料の中に確認され、伝統

工芸として息づく飯山仏壇はこの愛宕町において17世紀半ば以降に発祥したものと考えられている。また、臨済禅中興の祖である白隠の師として知られる正受老人（道鏡恵端）は、後に正受庵と呼ばれる庵に住して生涯を飯山の地で過ごした。自然や景色を捉え、これを利用するために整えられたものが多い。上述した菜の花まつりに加え、飯山雪まつりは既に30年近い歴史を持つイベントであり、阿弥陀堂は飯山の自然をフィルムにおさめた映画『阿弥陀堂だより』の撮影を記念して保存、整備されたものである。また自然豊かな農村部に住む人々の生活をそのまま人形で再現した作品が並ぶ高橋まゆみ人形館は、2010年4月のオープン以来、多くの観光客が来館している。

表4. 「体験的理解」のためのリソース

	有形資源	無形資源	総合資源
自然資源	千曲川(信濃川) 黒岩山(ギフチョウ・ヒメギフチョウ) 信越トレイル 斑尾高原(トレッキングトレイル) 鍋倉高原(ブナ林) 北竜湖 神戸の大銀杏	日本屈指の豪雪	菜の花の丘公園 まだらお高原 山の家 なべくら高原 森の家 斑尾高原スキー場 戸狩温泉スキー場
歴史文化資源	穂妻清水 飯山城跡 小菅神社 白山神社 万仏山三十三観音 正受庵 あじさい寺(高源院) 阿弥陀堂 飯山仏壇(国指定伝統的工芸品) 内山紙(国指定伝統的工芸品)	ふるさと(文部省唱歌) 朧月夜(文部省唱歌) 菜の花まつり 飯山雪まつり えびす講 奈良沢大天狗 小菅祇園祭(柱松燈神事) 五束太々神楽	高橋まゆみ人形館 伝統産業会館 手すき和紙体験工房 飯山市美術館 飯山市ふるさと館 長峰スポーツ公園 北竜湖資料館
複合資源	福島さんべの里(棚田)	笹寿司 高倉そば 農産物(米、アスパラガス、ぶなしめじ、みゆきボーク)	愛宕町雁木通り(仏壇通り) せめぐり遊歩道と寺社

アウトプットコンテンツ

地域に提案するアウトプットコンテンツの選定条件は

- ①飯山のPRにつながり、飯山にとって有益なもの。
- ②本学の学生のニーズや専攻に即しており企画提案可能なもの。
- ③本学の教員が企画の作成段階で指導可能なもの。

とし、モノ、メディア、コトの3つの分類から整理した。

モノにおいては、お土産の場合、飯山市内で販売される商品を指すが、内山紙や飯山仏壇などの技術を活かした商品などはむしろ市外で流通可能なものも考えられる。これらを地域産商品として組み入れた。

メディアのカテゴリーは、デザインやものづくりを中心に学んでいる本学の学生にとって、比較的取組みやすいものが多い。ポスターやロゴマーク、キャラクターなど飯山のPRに役立つコンテンツをリストアップした。

コトのカテゴリーは、イベントやツアーの企画を挙げた。近年、野外フェスやアート系イベントなど若者が中

心となって運営されるイベントが増えてきている。飯山をフィールドとした新しいイベント企画を提案することも有益だろう。また、飯山市は積極的に着地型観光を推進しているため、大学生の視点からのツアー企画も有益と考えた。

表5. 「アウトプット」コンテンツ

モノ	お土産 地域産商品
メディア	ポスター
	ロゴマーク
	ご当地キャラクター
	マップ(地図)
	フリーペーパー
	コマーシャル
コト	イベント企画
	ツアー企画

4. 2011年度—飯山地域連携プロジェクトの確立期

4.1. 「循環社会演習A 2011」の実践カリキュラム

先に述べた学習モデルと教育資源リストのリソースやコンテンツを組み合わせ、2011年度に「循環社会演習A 2011」として実際に実践した授業計画（実践カリキュラム）を図示したものが図4である。

事前学習では、概念的インプットのためのリソースに挙げた映画、ウェブサイト、パンフレットを提示し、イメージ分析を事前学習課題とした。さらに法政大学小島聡教授のゼミ学生と『阿弥陀堂だより』を共通教材とした飯山理解学習と、外部の学生の立場から飯山で自分たちが出来ることについての討議を組み込んだ。



図4. 「循環社会演習A 2011」の実践カリキュラム

現地視察での体験的インプットは、伝統文化体験、自然体験、食と農体験の3つの体験活動から構成した。これは、飯山の地域の魅力をできるだけ多く盛り込み、学生の反応を検証したいとの思いからである。

伝統文化体験は、飯山の伝統的工芸品である飯山仏壇(彫金)と内山紙(紙漉き)の体験プログラムである。自然体験は、鍋倉高原をフィールドとしたブナ林のトレッキング体験とネイチャークラフト体験を行なうプログラムである。食と農体験は、信濃平地区の民宿にて、そば打ち(富倉そば)やおやき作り、夏野菜の収穫体験からなるプログラムである。アウトプットコンテンツは、モノカテゴリーからお土産商品を継続的に組み入れたほか、新たにPRロゴマーク、ポスターを組み入れ、「いいやまPR企画コンテスト」として企画作品を審査することとした。

4.2. 「循環社会演習A 2011」の展開

コラボレーション科目として単位化されたこの年の履修者は、41名(服装学部8名 造形学部20名 現代文化学部13名)であった。3つのふるさと体験学習の参加人数の内訳は、伝統文化体験13名、自然体験14名、食と農体験14名、活動のスケジュールは表5の通りである。

事前学習やふるさと体験学習での経験をベースとした企画としてPRポスターのデザイン7名(9作品)、ご当地ロゴマークのデザイン11名(11作品)、お土産商品企画22名(22作品)が提出された。

表6. 循環社会演習A 2011の展開

4月	参加学生の募集(履修登録)	
5月18日	オリエンテーション(授業内容説明会)	事前学習
5月25日	『阿弥陀堂だより』鑑賞	
6月18日	法政大学との合同授業	
7月中旬	現地研修のしおり配布	
8月29日	1日目 移動および市街地視察	現地学習
8月30日	2日目 ふるさと体験学習	
8月31日	3日目 企画づくり	
9月1日	4日目 現地プレゼンテーション 帰京	
9月上旬	企画のブラッシュアップ	事後学習
9月13日	最終プレゼンテーション 企画案提出	
10月	飯山にて審査	評価・発信
11月2日~5日	文化祭にて、表彰式および作品展示	
2月~4月	飯山市内にて、企画作品展	

この年の入賞作品は、最優秀賞にお土産商品企画「ブナの森の白しゃもじ」が選定された。飯山の豊かな自然のシンボルであるブナの木とその森から湧き出る清らかな水で育った飯山特産の米、その二者を結びつけたアイデアが評価されたポイントであった。

優秀賞には、飯山市の鳥であるオシドリのイラストに「いいじゃない いいやま」の文字をあしらったご当地ロゴマークと、ブナの木の写真に飯山の特産品をモチーフにした「Iiyama」のロゴを重ねたポスターが選ばれた。



図5. 2011年度の入賞作品

4.3. 飯山地域連携プロジェクト2011の成果

4.3.1. プロジェクト運営の成果

2年目のこの年は、単位化を図り、現地研修を組み込んだ授業を開講することが運営上の課題であった。その課題に対し、3学部から40名以上の履修者が得られ、コンテストへの作品提出がなされたことは大きな成果であった。また、単年度のカリキュラムだけでなく、構想カリキュラムの開発により中期的な見通しのもとに活動を展開できる枠組みを構築できたことも成果である。

4.3.2. 地域貢献の成果

学生が企画した提案を提案に終わらせるのは惜しいとの声が寄せられ、商品化が検討された。1つは、前年度のモチーフパターン（葉の花・手ぬぎ和紙・アスパラの模様）を用いた手ぬぐいをつくり、優秀賞の「いいじゃない いいやま」ロゴをパッケージに採用したお土産商品の開発である。この商品化には本町商店街協同組合理事長の滝澤氏が経営する洋品店の協力をいただき、本洋品店の他、道の駅や本学セミナーハウスの文化北竜館など市内各所で2011年5月から販売されている¹⁶⁾。この他、最優秀賞の「ブナの森の白しゃもじ」についても2012年9月現在、信州いいやま観光局にて商品化について検討が進められている。

また、学生による企画を、飯山市民の方に見ていただけるよう企画作品展示を、2月～4月にかけて公民館、市役所、本町ぶらり広場ギャラリーにて実施した。



写真2. 商品化された「いいじゃない いいやま おてぬぐい」3組

4.3.3. 学生教育の成果

詳細は、本稿（2）に譲るが、その要旨として2点を挙げる。

- ①体験的インプットの楽しさや地域の魅力の再認識など、肯定的に飯山の地域特性を理解することができた。
- ②最終的に出来上がった作品を見ると、地域課題の解決といったコンセプトを反映させた企画は僅かであったものの、どれも事前学習や現地学習でのインプットに基づくものであった。

4.4. 飯山地域連携プロジェクト2011の課題

単位化と構想カリキュラムの開発により、本連携プロジェクトの枠組みが確立され、その有効性も確認できた。このように大きな課題はクリアされたが、枠組みの中身、すなわち実践カリキュラムをどう充実させ展開していくかが課題となった。

例えば、参加した学生からは「3つの体験活動を全部やってみたかった」という声が聞かれたり、他方、体験学習の講師の方からも、「教えるだけでなく、若いクリエイターを目指す学生ともっとじっくり語り会える時間がほしい」といった声があった。加えて、事前学習の合同授業を実施した法政大学小島聡教授からは、本学学生のポスター作品に着想を得たコミュニティポスター制作プロジェクトを呼びかけられた。このような我々の活動へのリアクションに耳を傾け、充実した実践カリキュラムを作ることが求められた。

5. 2012年度—飯山地域連携プロジェクトの拡充期

5.1. 「循環社会演習A 2012」の実践カリキュラム

2012年度の実践カリキュラムは図6に示すとおりである。この年のカリキュラムの特色は、

- ①「COOL JAPAN」をキーワードに、伝統文化体験を活動のメインにすえること。
- ②アウトプットでは「COOL JAPAN × いいやま」をキーワードとしたPR商品の企画にすること。
- ③法政大学との共同企画「いいやまの記憶プロジェクト」（コミュニティポスター制作）をサブ活動として実施すること。
- ④現地でのプレゼンテーションを公開し、広くその成果を問うこと。

の4点を盛り込んだ。

前年度の伝統文化体験は、彫金と紙漉きを伝統工芸職人の方に指導いただくだけであったが、技術のみならず、ものづくりへの姿勢なども学んでほしいと考え、伝統工芸職人との語らいの時間や、伝統工芸職人のガイドによる愛宕町雁木通り（仏壇通り）見学をプログラムに加えた。

伝統文化を体験の中心に据えたことと対応し、アウトプットコンテンツとしてCOOL JAPANをテーマとしたものづくり、すなわち、伝統工芸の技術に、COOL = カッコイイという若者感覚を盛り込んだ商品企画を課題とした。この商品は、飯山市内で販売されるお土産に限らず、様々なシーンでの販売も考慮するよう課題を設定した。

上記のメインプログラムと並行するサブ活動にあたる「いいやまの記憶プロジェクト」では、初日の宿泊先であったなべくら高原森の家周辺や、北竜湖に近くかつて小菅神社の社域だった小菅集落、棚田や阿弥陀堂が見られる福島さんべの里を散策し、撮影した写真をベースと

したポスター制作を実施することも課題とし、アウトプットとしては、PR商品企画とポスター制作の2つの作品づくりを試みた。

これらの成果を最終日に、公民館にて市民にむけてプレゼンテーションする機会を設けた。



図6. 「循環社会演習A 2011」の実践カリキュラム

5.2. 「循環社会演習A 2012」の展開

本稿執筆段階では、課題の提出を終えているが、審査は終えていないため概略のみに留める。スケジュールに関しては、現地プログラム以外は、前年を踏襲しているので掲載を割愛する。

この年の履修者は、18名（服装学部8名 造形学部10名）であった。提出されたPR商品企画のテーマは表6の通りである。伝統文化体験をメインプログラムとしたが、それ以外の地域資源からもインスピレーションを得て幅広いPR商品企画が提案された。

表7. 提出された企画（2012）

企画名	種別	活用した地域資源
観光に便利！情報と伝統のストラップ	雑貨	伝統工芸
和紙びあず	アクセサリ	伝統工芸
いいやまおとめ（ヘアアクセサリ）	アクセサリ	伝統工芸
RoopooTie(ループタイ)	服飾雑貨	伝統工芸
光の射し込む和紙カーテン	インテリア	伝統工芸
iPhoneケース～Kosuge-bird・Mizuho butterfly・Iiyama pegasus～	雑貨	伝統工芸
飯山の味	食品・雑貨	特産品(郷土料理)
皮膚美人	コスメ	特産品(米)
そばうむくーへん	食品	特産品(そば)
飯山の野菜ふりかけ いい飯、食べよう！！	食品	特産品(野菜)
あすバラダイス	雑貨	特産品(野菜)
健康ぎゅっと野菜	食品	特産品(野菜)
いいやま あじさいアロマ浴/いいやま 菜の花アロマ浴	雑貨	特産品(菜の花)
早乙女酒～コイの恋物語～	食品	自然
早乙女ほくこと鯉山りゅう	キャラクター	自然
やさしいいいやまレター	雑貨	複合

いいやまの記憶プロジェクトで制作されたコミュニティポスターは、写真とコピーによって構成されたフォーマットをベースにしており、出来上がった作品は、統一感を持ちながら、制作者の個性や感性が表現された作品に仕上がった。



図7. 「いいやまの記憶プロジェクト」作品の一例

6. 考察

本実践は、大学と遠隔地との地域連携であるという特色に加え、さらに2つの特色がある。その1つは、学部学科の横断的な教育活動として学生が参画できる活動であること、2つには、持続発展的な地域連携活動として継続するための構想カリキュラムを開発したことである。以下、この3つの特色の意義について検討を加えたい。

①地元と離れた遠隔地での地域連携の意義

遠隔地との連携を学生の学習理論から見た場合、対象地とした飯山は、単に、都会にはない自然や文化的環境があるだけではない。都市の学生が、飯山において学ぶ本連携プロジェクトは、正統的周辺参加論 (Legitimate Peripheral Participation : LPP) を指摘した J. レイヴと E. ウェンガー (1993 : 71) がいう実践共同体 (Community of Practice) と見なすべきであろう。実践共同体について、E. ウェンガーら (2002 : 82) は、他の組織との相違点を「目的：知識の創造、拡大、交換及び個人の能力開発」「メンバー：専門知識やテーマへの情熱により自発的に参加する人々」「境界：曖昧」「動機：情熱、専門知識への帰属意識」「継続期間：有機的に進化して終わる」の5つの指標からあげている。まず実践コミュニティの目的は、都市からの学生と、飯山の地域住民の交流や、地域資源を活用したPR商品の開発といった課題とその学習は、まさに、知識の創造や個人の能力開発に資するものと見える。メンバーについては、学生が自発的に参加していることのみならず、専門

が異なる教員がそれぞれの専門性を活かしつつ、自発的に参加している点や、本学の取組みを理解し、協力を惜しまない地域の方を含めた、学生、教員、地域住民の三者で構成される本連携プロジェクトのメンバーは実践共同体のメンバー要件に合致する。境界については、例えば、学生が提案したアイデアについては、学生の同意のもと、大学と地域が相互に商品化を試みることを許諾している。つまり知的所有権を、明確にするのではなく共有財と認識することにより利用可能性を広げているのである。継続期間については、「テーマに有用性があり、メンバーが共同学習に価値と関心を覚える限り継続する」とされる。本連携プロジェクトのテーマは、USR (大学の社会的責任) を果たすことをその根源としており、短期的に終わるものではない。構想カリキュラムの開発により、地域連携の主題を持続的、発展的なものとして展開できるよう試みている。以上のように、本連携プロジェクトは、5つの指標から見た実践共同体の姿に合致するものである。

LPPとは、実践共同体に参加することを通して学ばれる知識や技能の初期のプロセスを指す。すなわち、学習を個人の頭の中で受容されるものでなく、置かれた状況において生成されるものとする立場である。飯山での体験学習による体験的理解は、まさに、LPPに立脚したものである。体験学習のプログラムでは、確かに伝統工芸職人、民宿の女将、あるいはネイチャーガイドは、一見すると参加学生の指導的立場にあるが、意図的教授の主体ではない点において教員と区別される。また、体験学習の間、教員もまた意図的教授を行なわない。意図的教授が行なわれない中で、学生たちは、「飯山らしさ」を状況的に学習していくのである。実践共同体への参加は、通常の大学の授業とは異なるオルタナティブな学びの場としてその意義を見出すことが可能である。

他方、飯山にとって都市の大学と連携し学生を受け入れる意義は一体何か。正統的周辺参加は、本来、十全参加 (Full Participation) への初期プロセスであり、実践共同体の担い手を育成する初期段階をさす。しかし、大学のない地域において若者は都市へと流出し、実践共同体の維持がままならない現状がある。学生が一時的に飯山を訪問し、実践共同体に周辺参加することが、本来の意味で実践共同体の維持に貢献するものではなくとも、賑わいをもたらし、地域を活性化の一助となる¹⁷⁾。

学生と地域の関係性において、教員の役割を指摘するならば、意図的教授の主体ではなく、学生を「正統的

に実践共同体へ参加させるための保証人的役割として振舞うことが求められるといえよう。

②学部・学科横断的な教育活動としての意義

遠隔地域と連携する場合には、例えば、ゼミ単位や研究室単位で活動を行なったほうが機動力を発揮できると考えられる。しかし、本連携プロジェクトは、本学の全学部（服装学部、造形学部、現代文化学部）から学生が参加できる枠組みをつくることによって、1つの専門性に偏らず、多様な若者の発想力や行動力を地域に還元することを目指している。学生が提案する様々な企画は、実現可能性が高いものだけが評価されるわけではない。むしろアイデアの独創性が期待される。なぜならば、地元に住んでいる人では気づかない新たな価値を、周辺参加した学生が提案することに意味があるからである。新たな価値の発見が、地域住民に受容され、その結果として商品化など具現化されることが望ましいプロセスである。

2011年度のお土産商品企画（22作品）や2012年度のPR商品企画（18作品）を見ると、体験したものを十分咀嚼せずに企画化したものも散見されるが、「ブナの森の白しゃもじ」（2011年度の最優秀）や、飯山の自然風景を施した「浴衣」デザインの提案（2011年度）、「和紙カーテン」（2012年度）などは、学生の専門性を活かした商品企画である。飯山の伝統工芸の技術を活かしたお弁当箱に郷土料理を詰めた「飯山の味」は、留学生の視点から飯山の地域の良さを捉えた企画である。「いいやま 菜の花／あじさいアロマ浴」（2012年度）や彫金を施した「iPhone ケース」（2012年度）などは若い女子学生の嗜好性を反映したものも見られた。この他、食品、アクセサリ、雑貨、コスメ、インテリアなど幅広い企画がなされており、学部、学科を横断し様々な専門を持つ学生が参加した結果が反映されているといえよう。

③構想カリキュラムを開発の意義

地域連携の取組みは、本来、持続発展的であるべきである。研究者がフィールドワークの名の下に地域に入っていく多くの場合には、その結果や成果の地域への還元は、報告書の送付や調査結果報告会といった形で行なわれることが一般的であり、協働する期間も短ければ1年以内、長くとも数年程度のもので大半であろう。それもひとつの地域貢献であるといえる一方、地

域から「調査だけなら来ないでほしい」といった指摘を受ける場合もあるという（松宮朝，2011：44）。そのような形は、大学の社会貢献活動としての地域連携とはいえない。年を追うごとに、大学と地域との連携が広がり深まりを持っていくことが望ましい形である。活動を持続していくためには、大学と地域の双方で、人的、制度的、あるいは経済的な面での乗り越えなくてはならない要因があるが、加えて、活動内容それ自体が、マンネリ化、陳腐化しないような努力が必要である。このように中期的な展望のもと活動を推進するためには、地域資源を教育資源として整理するための構想カリキュラムを設定することは有効であろう。

今後の実践カリキュラムとして、2013年度は「食と農」を中心テーマとし、地域の農業や食文化をPRする企画提案や、2014年度には、飯山市が取組んでいるグリーンツーリズムを中心テーマとして、その中核施設である「森の家」や「山の家」などのPRや商品企画を構想している。

おわりに

本研究では、文化学園大学がUSR活動の一環として実践した飯山地域連携プロジェクトの3カ年の取組みを整理、検討した。3年という期間は未だ初期段階にあると捉えているが、遠隔地との地域連携を推進する上で、考慮すべき点を少なからず提示することができた。

この3年間の活動を経て、飯山各所から寄せられる期待がますます大きくなっていることを実感している。今後は、そのような地域のニーズや、より良い学生の学びの場となりうる形を模索し、本連携プロジェクトを新たな段階へと導いていかななくてはならない。そのためには、本連携プロジェクトに対する多角的なアセスメントが必要になるが、その点に関しては十分とはいえない。学生の作品に関する地域からの評価だけでなく、新たに取組んだ公開プレゼンテーションや伝統工芸職人との語らいの言説を分析することなどが、その手がかりとなるだろう。

註

- 1) 渋谷区連携プロジェクトでは、渋谷区の小学生を対象にファッションショー体験、浴衣の着せつけやヘアメイク体験、小学校での家庭科授業支援などの取組みを行なっている。詳細は、「ファッション循環型社会対応教育の新展開」ウェブサイト：<http://bwu.bunka.ac.jp/bunka-gp/index.html>を参照のこと。

- 2) 北竜湖納涼花火大会の主催は、本施設が加盟する北竜湖観光協会である。2012年で第46回目を迎えている。
- 3) 平成16年商業統計調査によれば、市内の商店数は卸売業33店(販売額119億円)、小売業350店(310億円)。これは前回調査(平成14年)に比べ商店数21店、販売額34億円のマイナスであるという。
- 4) 本町商店街協同組合では、かつての賑わいを取り戻すための様々な活動が行われている。毎月定期的に開く「六斎市」は、商店街中央に設けられたイベントスペース「本町ぶらり広場」を舞台に行われる。市民が様々なものを持ち寄り売ることができ、新しい市民交流の場として注目されている。また8月上旬に行われる「灯籠まつり」は、飯山の伝統工芸である内山紙を使った万を超える灯籠を通りに並べて行われる。昨年は、東日本大震災と飯山の隣村である栄村が震源地となった長野県北部地震の被災者への哀悼の意を込めて多くの灯籠が寄せられた。
- 5) 市内の製造業は食料品、飲料品、木材、家具、紙、印刷、プラスチック、情報、電子、精密機器などがある。平成2年の136事業所2450人をピークに以降10年間は減少。平成13年には46件1488人と大きく減らした。
- 6) 市域内におけるスキーによる集客は、平成3年の144万人をピークに減少。現在は最も多かった時期の半分程度にまで落ち込んでいる。
- 7) 『飯山市第四次総合計画 後期基本計画』では「産業の活性化」を柱のひとつとする。そしてこれを実現するための重点施策として、「観光、体験、癒し等の資源開発」を指摘し、中でもグリーンツーリズム・森林セラピー事業の推進を特に重視するものとして掲げる。千曲川におけるカヌーやラフティングボートは新しい目玉となりつつあり、また山地丘陵においてはトレッキングルートの整備拡充が積極的に進められている。
- 8) 信州いいやま観光局では、「飯山旅々」と銘打った着地型観光のプランを提供している。300を超える様々な飯山の楽しみ方が提案されており、利用者は滞在日数や人数、目当てとするコンテンツに従って幾つかの選択肢から旅の構成を選ぶことができる。
- 9) 日照時間が長く昼夜の寒暖の差が激しいという、米生産における好条件を活かして幾つかのブランド米が生まれている。『幻の米』、『金崎さんちのお米』などがよく知られている。
- 10) 法政大学人間環境学部小島聡教授のゼミナールでは、2006年から飯山市において「交流人口が創る地域学の間」の創出を目的とした「学びの里サマーカレッジ」を実施している。
- 11) 本学では、1年次の5月にキャリア形成科目「キャリアデザイン(導入編)ーフレッシュマンキャンプー」を開講し、セミナーハウス北竜館を会場に2泊3日の宿泊研修を実施し、自分の将来について考え、互いにディスカッションする機会を提供している。
- 12) 菜の花公園や伝統産業会館での彫金体験を行った。この様子は、地元の新聞2紙で紹介された。『信濃毎日新聞』(2010年5月10日)『北信濃新聞』(2010年5月22日)
- 13) 『信濃毎日新聞』(2011年7月19日)
- 14) コラボレーション科目は、本学独自の科目群であり、9月と2月に設定されたコラボレーション授業期間に開講される集中授業形式の授業であり、4単位の履修が卒業要件となっている。コラボレーション科目の特徴は、①学部・学科・学年を超えたコラボレーション ②専門の異なる教員同士のコ

- ラボレーション ③本学と産業界とのコラボレーション ④本学と地域・社会とのコラボレーション ⑤本学と国内外の大学とのコラボレーションを可能にする点にある。
- 15) この分類は、須田寛(2003:49)『新・観光資源論』による観光資源分類の枠組みを採用している。
- 16) 『信濃毎日新聞』(2012年5月18日)にて報じられている。
- 17) 2012年度の現地学習の最終日プレゼンテーションの講評の中で本町通商店街協同組合理事長の滝澤氏は、「飯山はCOOL IYAMAです。(カッコイイ飯山でなく)寒くて寂しいマチという意味です…でも、そこに毎年学生が来てくれ様々なアイデアを提供してくれることは有難いことです」と述べている。

文献

- 飯山市農業委員会(2004)『飯山市農林業の概要』飯山市。
 飯山市経済部商工課・観光課(2009)『平成20年度版 飯山市の商工業と観光の概要』飯山市。
 飯山市教育委員会(2012)『信州いいやま自然観察ガイド』飯山市。
 飯山市「飯山市公式サイト/飯山市の統計(平成23年版)」
<http://www.city.iiyama.nagano.jp/soshiki/kikakuzaisei/kikakuchousei/toukei/iiyamashitoukei.htm> (2012年12月1日閲覧)
- 飯山市総務部企画財政課(2008)『飯山市第4次総合計画 後期基本計画』飯山市。
 飯山市の自然編集委員会(1998)『飯山市の自然』岸田孔版印刷所。
 飯山市の自然編集委員会(2001)『ふるさと飯山の自然』葦友印刷。
 岩見光昭(1979)『信濃の手漉き和紙』信毎書籍出版センター。
 E.ウエンガー, R.マクダーモット, W.M.スナイダー著, 櫻井祐子訳(2002)『コミュニティ・オブ・プラクティス』翔泳社。
 加藤修, 三宅中, 吉村将人, 伊藤香奈, 大井藍(2012)「ESDとしての地域連携アートプロジェクトの実践報告ー教育領域における地域連携の意味と役割ー」『千葉大学教育学部研究紀要』60巻, 477-490。
 笹本正治(2003)『飯山風土記ー信濃の宝石「いいやま」ー』はおずき書籍。
 信濃毎日新聞出版部(1979)『信州の伝統工芸』信濃毎日新聞社。
 J.レイヴ, E.ウエンガー著, 佐伯幹訳(1993)『状況に埋め込まれた学習ー正統的周辺参加ー』産業図書。
 須田寛(2003)『新・観光資源論』交通新聞社。
 多田孝志(2006)科学研究費補助金研究成果報告書『グローバル時代に対応した国際理解教育のカリキュラム開発に関する理論的・実践的研究』, 第一分冊, 日本国際理解教育学会。
 ダニエルJ.ブーアスティン著, 星野郁美, 後藤和彦訳(1964)『幻影(イメージ)の時代ーマスコミが製造する事実』東京創元社。
 長谷川誠(2012)「大学の地域貢献に関するー考察ースポーツによる地域連携に注目して」『佛教大学教育学部学会紀要』9号, 211-222。
 文化学園大学「ファッション循環型社会対応教育の新展開」ウェブサイト
<http://bwu.bunka.ac.jp/bunka-gp/index.html> (2012年9月1日閲覧)

松宮朝（2011）「大学における地域連携・地域貢献と社会調査をめぐるノート」愛知県立大学『人間発達学研究』2号，43-50.

松村邦彦（2009）「大学発『地域貢献・再生論』について」九州大学『地域健康文化学論輯』1号，39-57.

宮下智裕（2008）「現代GPにおける地域連携教育プログラムの実践」金沢大学『工学教育研究』15号，119-128.

文部科学省「我が国の高等教育の将来像（答申）」（第2章 新時代における高等教育の全体像）

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101/003.htm（2012年9月1日閲覧）

羅明振，荒木勝，栗原孝次（2012）「大学の社会貢献・地域連携に対する意識」『岡山大学環境理工学部研究報告』17号（1），7-21